

## 第1分科会 高齢者（シニア）が核となる地域創生に向けて

コーディネーター：川瀬 健介（高齢社会NGO連携協議会理事、NPO法人生活・福祉環境づくり21参与）

パネリスト：

鈴木 隆雄（国立長寿医療研究センター理事長（総長）特任補佐、

桜美林大学加齢・発達研究所長、大学院教授）

澤登 信子（株式会社ライフカルチャーセンター代表取締役）

鷲尾 公子（認定NPO法人ぐるーぶ藤理事長）

皆さん、こんにちは。多数お集まりいただきましてありがとうございます。ただいまから高齢社会フォーラムの第1分科会を開会いたします。私、今御紹介いただきましたように、この高齢社会フォーラムに協力させていただいております、高齢社会NGO連携協議会、高連協の理事を務めております川瀬と申します。本籍はNPO法人の生活・福祉環境づくり21というところで、一応毎日働いているということでございます。

そこで、本年度の高齢社会フォーラムの全体テーマ、「挑戦するシニアが時代を開くー多世代が支えあう地域社会に向けてー」となっております。日本の高齢化の状況につきましてはあちこちで言われておりますので、皆様よく御存じのことと思えますし、また、現実的に前期高齢者と定義されている65歳以上の方は全て保護される側で、64歳までの生産年齢人口がこれを支えているという概念にとらわれている方は、もうほとんどいらっしやらないと思います。

昨今は65歳以上を一応高齢者と定めた定義に、いかななものかという声も聞こえてくるような状況でございます。そういった状況の中で、人口減少と少子高齢化が進む日本にとって、日本自体の持続可能性というものを考えたときに、やはり高齢者とされている方々、シニア層の頑張りに期待したいという声が大きくなってきております。

一口に高齢者と言っても、皆様方が持つイメージもそれぞれ異なるでしょうし、実際に高齢者とされている方々の気持ちの持ちようも当然ながら一様とは言えないと思います。そこで、この第1分科会では多様な高齢者像を少しでも明確化し、彼らに期待されること、あるいはその期待を実現化していくための課題解決策等々を論じて、多くの地域で多世代が支え合う生き生き高齢社会のモデルケースづくりというのが実施されていく機運を盛り上げていければと、こんなふうに考えております。



生活・福祉環境づくり21というNPO法人なのですが、ここに書いてございますように、高齢者を中心とした全ての生活者が自立して安心・安全に豊かな生活を送れる環境づくり、こういったことをミッションとしまして、平成10年、実は東京商工会議所が産業界に呼びかけて立ち上げた団体でございます。

## はじめに・・・SFk21について

**生活・福祉環境づくり21は、「高齢者を中心としたすべての生活者が、自立して安心・安全に豊かな生活を送れる環境づくり」を目的として、平成10年、東京商工会議所が産業界に呼び掛けて立ち上げた団体です。**

平成27年4月1日現在、会員のほとんどが企業か団体。(61企業、6団体、4学校法人、1個人)

### ○主な事業実績

福祉住環境コーディネーター検定試験の企画

アクティブスクエア2001の開催

新宿キャンペーンの実施

スマートコンテストの開催

高齢者のつぶやき調査の実施

自由時間倶楽部の企画・立ち上げ・運営

「生・活(いきいき)」知識検定試験の施行

ウェルビーイング・コンシェルジュの認定・登録

その他

したがって、実は私も本籍は東京商工会議所の人間なんですけれども、全国の商工会議所の中で商工会議所がこういったNPO法人を立ち上げたという例はこの1つだけだと思っています。

なかなか商工会議所ということ自体が一般的ではないんですが、もちろん商工会議所と銘打つ以上、メインの仕事は商工業の振興なんですけれども、もう1つ、あわせて社会一般の福祉の増進に資することというのが商工会議所法という法律で決められていまして、そういうミッションもあわせ持っているのが商工会議所。

その商工会議所が立ち上げたのが、生活・福祉環境づくり21ということで、今年の4月1日現在で、NPO法人といながら会員のほとんどが企業か団体であるという、ちょっと特殊なNPOでございます。

これまで、例えば福祉住環境コーディネーターという人材育成のための検定試験を企画して、東商に施行させたり、あるいはアクティブ・スクエア2001、これは地域の中で率先的に活動している方々のソフトの展示会です。2001年ですから、当時ちょっと早目の仕掛けだったかもしれないですけども、幕張メッセにかなり大勢の方においでいただいて、いろいろなブースで、実は私はこの地域でこんな集まりをして活動していますよというような、そんなソフトの展示会を実施したりしました。

或いは、新宿キャンペーンという形で、新宿のまちを10のブロックに分けて、10人ずつ、高齢者からお子様、あるいは障害をお持ちの方、いろいろな方が入っていただく10人のグループでその決められた地区を歩いていただきながら、その地区が人々に持っている優しい面と優しくない面を探してきていただいて、それを地図に落としいただき、今後のまちづくりを考えるということもやってきました。

## ●地域コミュニティの今後の在り方

そういう様々な事業を行ってきた団体でございますけれども、1つ、進めていただいて、今まさに超高齢社会が現実のものとなっている、こういう状況の中での今私どもの団体のアプローチ、3つのキーワードで実はいろいろな仕事を展開しております。3つのキーワード、1つは、「地域力の向上」。安心・安全というものを地域の中で支え合いながらつくっていききたい。あわせて、一極集中みたいなものもここで回避をしていけないだろうかという形で、地域力向上に取り組んでいます。

## いきいき高齢社会の実現に向けたSFK21のアプローチ(キーワード)

### <3つのキーワード>

#### 地域方向上 安心・安全の担保と一極集中回避

- 生活者同士の共助・互助の拠点(プラットフォーム)づくり
- 新たな地域コミュニティの構築
- 地域ごとの個性の明確化による新たな多世代住民の誘引

#### 協働 持続可能な仕組みづくり

- 生活者、行政、企業、団体等のコラボレーション
- 想いのベクトルを同じくする者の結集
- 事務局機能の整備

#### 団塊世代活用 地域活性化人材の育成

- 経験と知識を活かした地域資源の開発・事業化
- 地域包括ケアの主役づくりと健康寿命の延伸
- 地域歐着陸のサポート

具体的に幾つか挙げますと、まさにそこで暮らす生活者同士の共助、互助、これの拠点をつくっていけないだろうか。新たな地域コミュニティを構築していきたい。場合によっては、今の団塊の世代等々、企業の中で知識を持ち、いろいろな経験を持っている方々が地域に帰って、何か新たな地域資源を——これまでの地域資源を事業化していくという面もあるんですが、もう1つ、これまでなかったものも、新しい地域資源を見つけて1つの形にしていくみたいなのもできるのではないだろうか。地域ごとの新たな個性といったものをつくって明確化していくことによって、そういう仕事をする地域だったら、私も住まいもそこに移して一緒にやりたいね、みたいな方々を吸引していくような形、多世代住民を誘因して、一極集中を回避していくこともできるのではないだろうか、そんなことも研究をしております。

もう1つのキーワードが「協働」です。コラボレーション。持続可能な仕組みづくりということで、今は1つのセッション、あるいは高齢社会対応でもいろいろな団体がございますけれども、1つの団体だけで何ができるという状況にはないと考えています。生活者、行政、企業、団体等のやはりコラボレーションが必要だろうと。その中で、やはり同じ思いを持つ、そういうベクトルを同じくする人々を結集していきたいと。みんなで支え合う形での地域づくりをしていきたい。その下に事務局機能の整備、これはちょっと異色ではありますけれども、こういったいろいろな地域の中での動きが展開されていく中で、やはりこれを全国のいろいろな方々に御紹介をすることも必要だろうと。つまり、これから高齢社会の中の地域をどうしていくかということ全体を見渡した事務局的な機能を持つことが、これからは必要になるのではないだろうかということを考えています。実は商工会議所というのが全国で市単位に500近くございまして、こういったところがまさにそういう事務局機能を持てればいいな、なんていうことも考えたりしているところがございます。最後のキーワードが「団塊世代活用」ということで、地域活性化人材の育成。今いろいろなところで人材育成が必要だよと、生活コーディネーター的な形で地域の中でまとめていく、コーディネートしていく人材の必要性がうたわれていますけれども、やはり団塊の世代に我々は注目をしていきたい。つまり、これまで実は団塊の世代、日本の高度成長にあわせて、どちらかという家庭とか地域をないがしろにするとっては言葉が悪いですが、どちらかといえば、仕事集中で日本が高度成長で伸びていくのを支えてきた人たちです。

そういう人口が増えていき、高度成長の中で地域という1つのコミュニティは失われていったと思われま。昔の江戸時代の長屋的な感覚。私の子供の時代はまだ隣のうちにおしょうゆを借りにいったりというようなこともあったんですけども、まさに井戸端会議みたいな形で地域の方々がお話をしている、この時間になると帰ってくるあの子、どうしたかな、みたいな形で、ある面危機管理をしている、そんなような状況もあったんですけども、そういうようなコミュニティも少し壊れていっている。

であるならば、その団塊の世代の方々が企業、あるいは団体で培った知識、経験を今度は地域に生かして、新たなコミュニティをつくっていく人材になっていただけないだろうかという思いもありまして、経験と知識を生かした地域資源の開発、事業化に団塊の世代が乗り出していきたい。

あるいは、地域包括ケアの主役づくりという形でもお願いしたい。ただ、そのためにはやはり健康寿命の延伸ということが1つの大きなポイントになってくるので、この辺も後ほどまた鈴木先生あたりにもお話を伺いますけれども、どうすれば健康寿命と平均寿命を近づけていけるのかみたいなことも、1つの研究テーマになっています。

## ●地域参画の在り様

もう1つは、まさに団塊の世代の方々が地域に軟着陸していくサポートをどうしていくのか。こういう話をしていると、地域の中で、まさにこれまで企業で活躍した人が地域に来て活躍していただけるのはいいんだけど、少し早目に動かしていた女性陣からは、どうしても縦社会から抜け切れない人が地域に来ると、かえってなかなかいろいろな動きが阻害される面もあるんだという声も実は聞こえてきます。先ほど午前中、樋口先生のお話もありましたように、やはりワンクッション、新たな勉強といえますか、企業での縦社会から、これから地域の中の横社会の中に行くということも含めて、ワンクッション勉強してから、また新しい地域の中での活躍を進めていきたい、そういうようなサポートみたいなものも仕組みづくりとして考えていきたい。こんなことを実は私どもの団体では今展開をしているという状況でございます。

それでは、パネラーの方々から順に御発言をいただきたいと思います。

初めに、先ほど御紹介がございました、今、桜美林大学の大学院教授、あるいは加齢発達研究所の所長もお務めになっております、国立長寿医療研究センターの理事長（総長）特任補佐、鈴木隆雄先生から、主に例えばプロダクティブ・エイジングとも呼ばれる現在の高齢者像につきまして、これまでの研究のデータ等も取り入れながらお話をいただければと思います。 よろしくお願ひいたします。

## ●日本の高齢者の実像

【鈴木】 ただいま御紹介いただきました、桜美林大学の加齢発達研究所におります鈴木でございます。私のほうは、今日のこの高齢社会フォーラムの中で、特に活力ある高齢社会に向けて、何をまずきちんと決めておいたほうがいいのかというお話で。高齢者とは一体何ぞやというわけではないんですけども、一般には65歳と言われておりますけれども、皆様、御存じのようにかつての65歳と——かつてというのは20年前、30年前、まだ平均寿命が70歳ころまでの高齢者の方と、今日の高齢者の方とは全く違う高齢者像になってきております。午前中に樋口先生からも少し御紹介がありましたけれども、今日の高齢者というのは10年前、20年前の高齢者に比べると、10歳以上、いわゆる健康度としては若返っているということがわかっております。若返った高齢者、社会に貢献のできる高齢者、そういう方々が今実は日本の高齢社会を形づくっているわけです。そういった実態をきちんと科学的な目で皆様に御紹介したいなと思います。私はずっとそういう高齢者の健康に関する研究を続けてきたという意味から、少し話がかた苦しい話かもしれませんが、できるだけ皆様の実感に沿うような形でお話をさせていただきたいと思っていますけれども、そんなようなことをお話をします。



## 高齢者の定義を再考する

- Bismarck (100年以上前のプロイセン王国首相)による定義。
- 時代が異なれば「高齢者」とされる集団の健康水準も変化する。
- 過去の日本の「高齢者」と現在の「高齢者」の健康水準(生活機能の根幹をなす身体機能)はどのように変化してきたか？
- 現在と近未来の日本の高齢者の活動能力はどのように測定されるべきか？

### ● 高齢者の定義

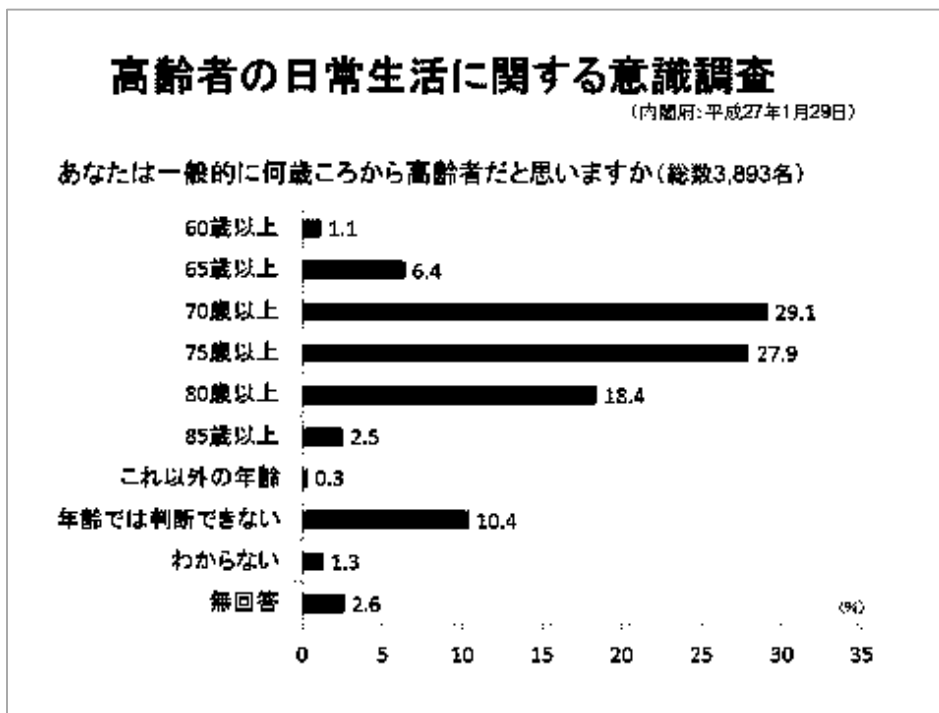
まず、高齢者の定義を再考する。昨日、厚生労働省からまた日本の平均寿命が伸びたというコメントがございました。夜7時のニュースを御覧になった方、いらっしゃいますでしょうか。私も実は出て、それに対してどうしてなのかということをちょっとコメントさせていただきました。高齢者の平均寿命が伸びて健康度が上がるということがどういうことを意味しているのかとか、今後もし上がり続けるのかどうかとか、いろいろなことを実は聞かれて、コメントして、そのうちの一部だけしか放映はされていませんでしたけれども。

少し高齢者の定義を最初に御紹介したいと思います。今65歳以上と言っているんですけれども、これはどこで誰が決めたかということ、これは極めていいかげんで、100年以上前にBisMarckという——聞いたことはあると思うんですけれども、その人が、特に最初軍人をイメージしていたんですけれども、国に尽くした軍人に対して、ある一定の年をとったら、あとは何もせんくてもええから、ゆっくりのんびり過ごしてほしいということで、じゃ、何歳にしますかといったときに、BisMarckは、じゃ、65歳以上にしよう決めちゃったんです。

こんないいかげんなことはないんです。何で65歳にしたかということ、当時のプロイセンで65歳以上の人は1%、100人に1人しかいなかったらしいんです。100人に1人ぐらいだったら、ちょっと言葉は悪い、江戸時代の言葉ですけれども、捨て扶持食らいでいいんじゃないかということのようだったんです。こんないいかげんなことで始まっちゃったんですけれども、今や立派にWHOも高齢者とは65歳以上であるということを基本的に決めています。

ところが、発展途上国ではいまだに60歳を高齢者として決めている国があります。例えば、隣の中国などはまだ60歳を高齢者として定義しているんですね。ですから、話しているとかみ合わないわけです。まだそういう一部の国々では60歳ということを行っていますけれども。ところが、65歳といっても、BisMarckのころの65歳、今の100年以上前ですから、日本でいうと明治時代ですね。そのころの65歳と今の65歳というのは同じ年齢だとしても、全く違う集団だというのは、皆さん、容易に想像がつくんだろうと思います。

そのとおりで、実際に時代が変われば、高齢者というもののあり方や定義というものは当然ある程度見直していかないと、高齢者ばかりが増えている、増えているという話なんです。健康度から見ても、それから社会に対する貢献度から見ても、100年前の65歳と今の65歳では全然違う



ということを、まず認識しておかなければいけないんだろうと思います。これは実際に、内閣府のほうから、発表されたデータですね。これ、一般の方に、あなたは何歳ごろから高齢者だと思いますかと約4,000名に聞いたところ、ほとんどの方が70歳以上とか、75歳以上と考えておられるんです。それから、年齢では判断できない。これも1つの非常にいい答えかもしれませんが、一応暦年齢でいうと、70とか75歳というのは、皆さん、圧倒的にそういうふうに使っていらっしゃるということです。

しかし、御存じのように社会の仕組みや何かは、全て65歳以上が、先ほど川瀬さんがおっしゃったように分子になってしまう。全て分子として扱われるということになりますので、何となく実感とずれているなということがわかります。これは、もう2年ぐらい前になりますか、新聞のほうで報告された「体力自慢の70代増加、ジムで汗」と。文部科学省の調査では、12年前より5歳若返っている。ジムに通っている方でも、そういう若返りが見られるといったようなデータです。

#### ●日本の高齢者は若返っている？

じゃ、若返っているから、定義も変えましょう、あるいは何しましょうという前に、若返っているというのは、一体何をもって若返っているかということをはっきりと考えておかなければいけないですね。決めておかなければいけないです。ただ漠然と、何か若返っているんじゃないのということで、勝手に高齢者の定義を変えられてしまうと困る人もたくさんいるし、逆に何でそこが新しい定義なのという、科学的な根拠とは何があるのということになってしまいます。

ちょっとかた苦しい話かもしれませんが、科学的根拠があるかどうか。実際に日本の高齢者というのは今どのように年をとっていつているのかということ、少し紹介させていただきます。これは、ある特定の地域で20年以上測定されているデータの一部を紹介したものです。